

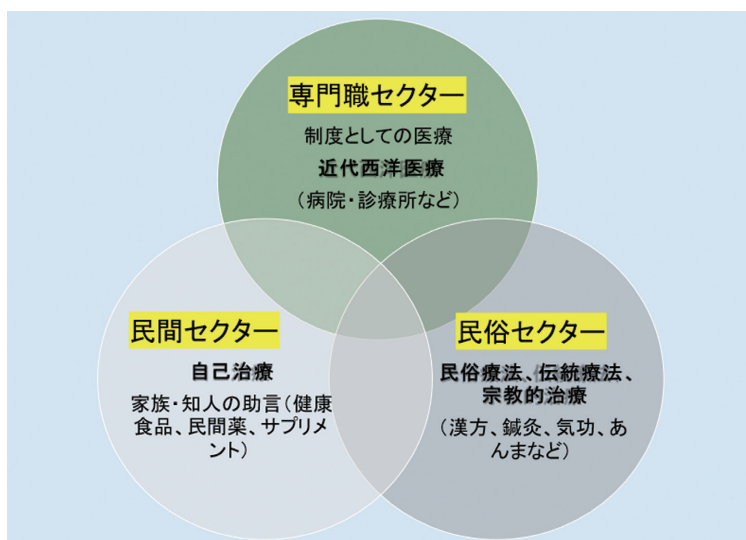
# 「疾患」と「病（やまい）」のちがいに着目したソーシャルワーク

島根大学人間科学部 足立 孝子

筆者は、2019年9月、カンボジア王国を訪問した。ソーシャルワーカーを目指す学生を連れて、現地の児童養護施設を訪問するというワークキャンプである。ここで、カンボジアの医療の現状を目の当たりにすることになる。カンボジアは、1975年からポルポト政権によって、あらゆる分野の知識人が殺戮された。そして、収容型精神病は破壊され、患者や医師も殺害されている。現在も西洋医学が進んでおらず、①クルー・クメール（薬剤師）、②僧侶、③シャーマン（霊媒師）らが、あらゆる病気の治療を担っている。シャーマンによる病気治療とは、シャーマンと呼ばれる霊能者が、霊と交流し、予言や治療をおこなうことである。祭壇の前で、身支度をした女性のシャーマンが、精霊を呼んで、予言を聞いたり、病気治療をおこなう。マットを敷いて患者を寝かせ、悪いところを言い当て、具体的な指示をする。たとえば、「金属のベルトをつけるといい」、「〇〇の薬草を煎じて飲みなさい」、あるいは、「疎遠になっている親戚と仲良くした方がいい」といったアドバイスである。カンボジアでは1990年代になっても、精神保健医療サービスはほとんど存在せず、①～③の伝統的治療師のみが精神疾患の治療にあたっていた。現在もこのような治療が主であり、精神疾患の領域では、予後が非常に悪く、私宅監置も余儀なくされているという現状がある。

アン・ファインディマン（2021）の『精霊に捕まって倒れる』は、実話に基づく著作である。ラオスから難民として米国に来たモン族の子どものリア・リーには、重い「てんかん」があった。リアを支える両親と米国の医療スタッフの間には、衝突が絶えなかった。というのも、モン族にとっての「病（やまい）」の治療は、シャーマンに来てもらうことであり、シャーマンは見えない世界に棲んでいる精霊たちと交渉して、患者の健康を取り戻すものと理解している。そして、「病（やまい）」の原因は、「食べてはいけないものを食べる」「汚染された水を飲む」「先祖へのお供えを怠る」「誰かに呪われる」などといった「魂の喪失」として捉えている。リアが5歳のとき、米国の病院で死を宣告されたのち、父親は娘の身体につながれたチューブを全部引っこ抜いて、リアを連れて逃走する。リアはいわゆる植物状態だったわけだが、家族の一員として皆と過ごし、丁寧なケアによって、その後25年以上も生きることができた。この本は、1997年に米国で刊行されて以来、米国の医療、福祉、ジャーナリズムなど幅広い分野の必読書になっている。

医療人類学者のアーサー・クライマンは、「疾患」とは医療専門職が医学モデルの分類に従って、当事者のいわば“外側”から、科学的・論理的に捉えようとするものである。一方、「病」は、当事者である患者や家族によって経験された個別的・主観的なもので、個人の“内側”から“物語られる”ものであるとしている。上述のモン族は、「てんかん」も「病（やまい）」として捉えていることがわかる。アーサー・クライマンは右図のように三つのセクターに分けて整理している。モン族の話でいう「専門職セクター」は、米国の病院のような高度な医療が施される場であり、「疾患」として捉えている。一方、「民俗セクター」はシャーマニズム的な治療であり、「病」として捉えている。シャーマニズム的な治療は、風土のなかで、生きづらさを抱えた人を見て、「病」と捉える。これは環境との相互作用を重視するソーシャルワークと通じるものがあると考えられる。



これまで、道徳的・宗教的に「病」として捉えられていたものが、近年は、「疾患」として捉えられる傾向にある。「生きづらさ」を即、医療化するのではなく、「揺れ」として受け入れることも大切である。三つのセクターのバランスを今一度見直し、風通しを良くすること、そして専門職は他のセクターを理解し合い、ソーシャルワーカーがそれぞれをマネジメントすることが重要であると考えられる。

【キーワード：シャーマニズム、病、疾患、民俗、ソーシャルワーク】